魔剣士
リーネ2
乙女穢されし戦場
第1巻
酒井仁
挿絵：桐島サトシ 原作：まくらカバーソフト
試し読み版

プロローグ　大陸を覆う暗雲　008
第1話　大いなる魔導国の守護者　073
第2話　誇り高き剣の女王　136
第3話　バロックという男　200
第4話　勝利の果てに　234
番外編　癒し乙女の危機　286

魔剣士
リーネ2
第1巻
乙女穢されし戦場

魔剣士リーネ2

乙女穢されし戦場

人物紹介

リーネ

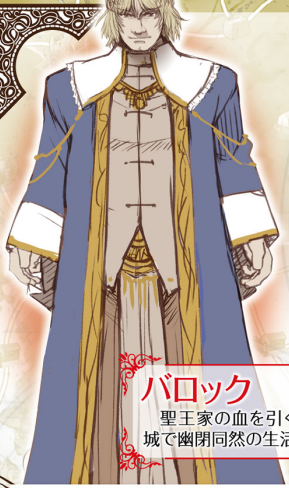
騎士の国ストームランス公国の君主。亡き父の後を継ぎ、まだ少女の身でありながら祖国の復活のため奮闘する。

アレス

物語の主人公。ハイランド王国軍随一の知将として名を馳せる。腐敗する王国の現状を憂いている。

ベアトリス
魔導国家ヘスティア公国を統べる女王。絶大なる魔法力の持ち主
ドロシー
サブリナ
ウェンディ
ヘスティア女王ベアトリスに仕える魔法使い三人衆。
のんびり屋で子供っぽい性格のドロシー。穏やかで大人っぽいサブリナ。せっかちで怒りっぽいウェンディ。

シンシア
宗教国家アウラ神国の女王。〝アウラの巫女〟として
アウラ信教の頂点に立つ。
マリオン
アウラ神国の天才技師。シンシアとは幼馴染で親友。
セリア
南国の島国で一人静かに暮らす狩人。狩りの腕は超一流。
ミュリエル
主人公アレスの妹。修道院で習った神聖魔法を得意とする。
ノーラ
マーサ公国の少女。ブリッ子でお調子者だが意外とドジ。

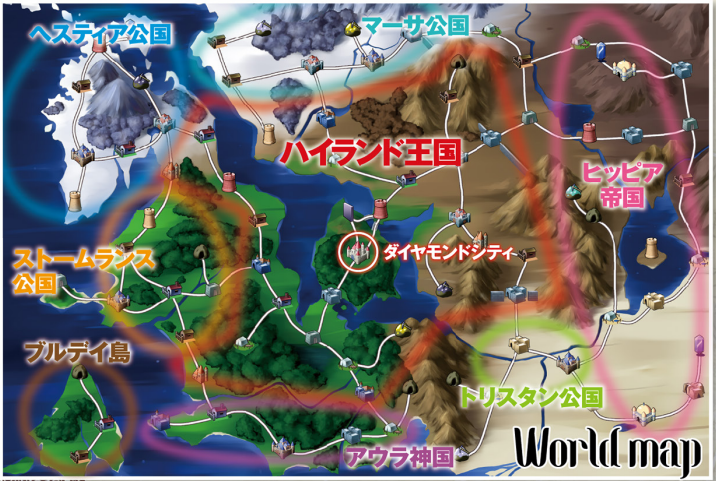


オーウェン

元々はヘスティア公国の魔導士だったが、今はハイランドの将軍として古巣と敵対する。

バロック

聖王家の血を引く貴族。地方の城で幽閉同然の生活を送っている。



プロローグ　大陸を覆う暗雲

1

今より約四〇〇年もの昔――世界の東に位置する大陸は諸侯、多民族が入り乱れる地であった。

街は焼かれ民は飢え、戦乱と度重なる飢饉が人々の心を荒廃させた。

しかし救世主が現れる。

彼は強いカリスマと高い指導力の下、たちまちにして大陸を平定し、大帝国を築き上げた。

その国――「ハイランド王国」を統べる英雄は「聖王」を名乗り、以後数百年にわたる太平の世が続いた。

だが、人は常に欲にまみれ、権力を欲し、私腹を肥やそうとするものである。ならばなぜ「聖王」はハイランド王国を長きにわたって統治し続けることができたのか。

聖王は、王国を治める資格を有するのは、「聖王の四親等までの男系の男子」のみというルールを定めたのだ。

継承の資格がある者には、特殊な魔法によって、その身体に『聖王家の紋章』が現れるようになっている。

その代わり、聖王の資格を継ぎし者は国のことを第一義と考え、独裁によって圧政を敷くことは厳に戒められた。

歴代の聖王はその掟に従って身を慎み、家臣の声に耳を傾けてきたのだった。それは厳格なる掟あればこそ。

そして聖王に仕えし三つの同盟国の存在も大きかった。聖王の剣となりし騎士の国、ストームランス公国。聖王家の智恵袋となる魔導士の治める国、ヘスティア公国。最後に祭事を取り仕切ってきた神官たちが支配する国、アウラ神国である。

この三つの国は聖王を支え、平和を守る礎となってきた。

三つの同盟国、そして「聖王家の紋章」というルールあればこそ、ハイランド王国は三〇〇年以上もの平和を保ち続けてきたのだった。

その太平の世に乱れが生じたのは、十八年前。第三十二代聖王マクシミリアンの代のことであった。

歴代の聖王たちが世継ぎとなる男子を残すことができず、聖王の後継者が完全にいなく

なってしまったのだ。
げに浅ましきは人の欲望。
聖王の血筋を失った治世が乱れるまでに、二〇年とかからなかった。
多くの諸侯が「我こそは聖王にふさわしい」と主張し、領主や貴族は人々に重税を課し、権勢と私腹を肥やすことに腐心し始めたのだった。
王国の乱れを見た異民族がそれを看過するはずもなく――――各地では再び戦乱の火種が起きては鎮圧され、多くの血が流された。
この物語は、そんな戦乱の時代から始まる。

「またひどくやられたものだ……」
ここはハイランド王国の北方に位置するガナッシュの町。
北方の異民族「ヒッピア人」が国境付近のガナッシュに侵攻したとの一報を受け、一軍を率いてガナッシュ奪還に進軍してきたのが、ハイランド王国の若き将軍アレスであった。
「アレス、斥候が帰還した。やつらもう抗戦の意志はなさそうだ」
そう報告するのは幼馴染でもあるハイランド王国の騎士エルヴィン。一見気障（きざ）な優男に見えるが、常に前線で剣を振るうアレスの頼もしき片腕である。

エルヴィンは柔らかい巻き毛を指でひねると首を傾げる。
「にしても妙だね、報告では敵はもっと大軍だと聞いていたんだが、まったく拍子抜けもいいところだ」
「まあ、それはエルヴィンさまとアレスお兄さまが勇猛だったからに決まっていますわ」
と、これは僧侶服に身を包み、薄茶色の髪を肩まで垂らした、まだあどけなさの残る少女。
アレスの実妹でもある少女ミュリエルは、こう見えて回復魔法を使いこなす優秀な僧侶。
少女に褒められてエルヴィンは得意げだが、アレスは報告と実際の敵戦力の齟齬に疑問を抱いた。
（敵戦力が多いというよりは、こちらへの抵抗が少なかった……？　よもやヒッピアの罠とも思えんが）
アレスは数名の兵とエルヴィンを連れ、街中を視察することにした。
ヒッピア軍は騎馬を駆使して電撃的な攻撃を仕掛けてくると聞くが、アレスたちが相手をする限りは数も少なく、それに比して街の被害は甚大だった。
街のあちこちではまだ完全に火の手が消えていない。
「やはり変だ、エルヴィン。街の正門を見ろ、これはヒッピア軍の襲撃で破損したものじ

ゃない」
「ど、どういうことだ？」
本来、敵の侵入を防ぐはずの正門は門作りもガタガタで、とても騎馬隊を防げる代物ではない。
「もうずっと以前からこんな状態ですよ。街が全滅しなかっただけでも奇跡ってもんだ」
吐き捨てるように言ったのは、正門にもたれかかっていた市民兵と思しき男。包帯を巻き、右腕を吊った痛々しい姿に、アレスは違和感を覚えた。
「キミは、市民兵なのか。街の警護の要とも言うべき兵士が、どうしてそんな槍を」
がしゃりと彼が地面に投げ出したのは、細い木の先に小さな矢じりが付けられただけの、粗末極まる武器。
「俺たちに回されるのはこんな武器だけなんですよ。農具や鉈で家族を守って死んだやつだっている」
「馬鹿な……正門を修繕する予算も下りていなかったというのか」
そこにミュリエルが駆けつけ、兵士に回復魔法をかけ始める。心優しき少女は目尻に浮かぶ涙を拭こうともせず、一心に兵士の治療を続ける。
「あんたたちが街を救ってくれたことには感謝する。だが、ヒッピアの連中が攻めてきた

とき、真っ先に逃げ出したのは領主や貴族だったんだ！」

「……」

「あいつら、街の若い娘だけを連れていきやがった。お、俺の娘も……！」

「お、おいよせ！」

若き軍師の拳が怒りに打ち震えるのを見て、近くにいた兵の一人が包帯の兵士を慌てて止める。

所詮本国付きの騎士と市民兵では身分が違いすぎる。だが負傷兵の怒りは収まりはしない。

「ろくな装備もない、兵士の数も足りていない、あとに残されたのは老人と病人と子どもだけだ……そこにやつらが、ヒッピアの連中が……っ」

「――エルヴィン」

我ながら、こんな低く冷たい声が出せるのかと、アレスは思う。

「直ちに警備兵の実情と改善案、人員と予算の計上を。この街の領主に対する更迭命令をグスタフ王に進言。ガナッシュに降りるはずだった防衛予算をどこの誰が横流ししたのか、徹底的に追及してやる」

「ア、アレス……さ、早急に調査をさせよう。だから落ち着いてくれ」

常日頃、滅多に激昂しないアレスが誰よりも騎士道を重んじる性格だということを、エルヴィンは知っていた。市民兵の言動をいっさい責めることなく、アレスは未だ黒煙の上がる空を、いつまでも睨みつけるのだった。

本国に帰還したアレスは、エルヴィンのまとめた資料を携え、さっそくグスタフ王に謁見を申し出た。

彼は聖王家の外戚だが、「聖王」の継承者ではない。だが、現在のハイランド王国を実権を握っているのは彼だ。

ハイランド王国の騎士であるアレスにとっては、仕えるべき君主であることに間違いはない。

「おおアレス、お手柄だったようだな。さすが名将ガイウスの忘れ形見よの」

「有り難き幸せ。ですが、ガナッシュの受けた被害も決して少なくは」

だがグスタフ王はひたすらにアレスの軍略と采配を褒めちぎり、今宵の晩餐会にぜひ出席するように言った。

「陛下、どうか今一度国防の抜本的見直しを」

「うむうむ、じゃが今宵はお前を労うための晩餐会。明日よりまたハイランドのために尽

くしてくれい」

こうなっては王に聞く耳はない。

グスタフは野心家ではあるが、自分に都合のいい言葉を好む傾向にある。

「では晩餐会を楽しみにしておるぞ、アレス」

上機嫌の王に深々と一礼すると、アレスはその場を退出した。

その夜――――アレスはドレスアップしたミュリエルをエスコートして晩餐会に出席した。テーブルには山海の珍味が並び、貴族たちは浴びるように高級酒を呷っている。

（ガナッシュの惨状とは雲泥の差ではないか）

だが、蛮族を駆逐した英雄が苦い顔をしているわけにもいかない。

挨拶回りをしていると、王の片腕とも噂されるヘルマン軍務卿がにこにこと愛想のいい顔で近づいてきた。

「これはヘルマン卿――――報告書は読んでいただきましたか」

「さすがは騎士アレスどの、と言いたいところだが少々いただけませんな。あれではまるで田舎町に対し降りるべき予算が横流しされているような記述」

「い、いえ、しかし兵たちはろくな武器も支給されず、街の守りも手薄なままで放置され」

唇に薄笑いを貼りつかせたまま、ヘルマンは酷薄そうな目をアレスに向ける。王に取り

入ることに腐心するこの老人が、アレスは好きではなかった。
「たかがちっぽけな街のことで、大げさに過ぎるのでは？　所詮は取るに足らぬ庶民の命に過ぎぬでしょう」
ヘルマンの言葉に、アレスは息を呑む。軍務卿は爬虫類の目つきで言葉を畳みかけてくる。
「噂ではガナッシュ領主は街の若い娘を率先して避難させるという『英断』に及んだとか。報告書とはずいぶん話が違うようだ」
英断――――？
守るべき民を見捨て、若い娘を拉致した挙句に尻に帆かけて逃げ出した卑劣な行為を「英断」だというのか。
エルヴィンの報告によれば、ガナッシュの領主はずいぶんと私腹を肥やしていたようだ。これは立派な横領行為ではないか。
「名将ガイウスどのの御子息とも思えぬお粗末な顛末ですな。たかだか北方の蛮族相手に三〇〇〇の兵を率いて勝利した程度で得意げになるとは、些か呆れ果てましたな」
「――――――」
怒りのあまり、グラスを持つ手の先が冷たくなるのを感じた。この男は、報告書を握り

つぶすつもりだ。
（どこまで――どこまで腐り果てているのだこやつらは。守るべきは民、守るべきは国だというのに！）
だが、アレスはハイランド王国に、グスタフ王に仕える騎士。
剣の腕や軍略には覚えがあっても、政に関してはまだ若輩者。老練なヘルマンとまともに渡り合う自信はない。
「出すぎた真似をして申し訳ありません、ヘルマン卿。無辜（むこ）の民を守るのは兵士の役目、彼らにどうかその役目を果たさせてやってください」
「ふん――騎士たるもの民の盾たれ……ご立派な心掛けですな。くくく」
屈辱を堪えてアレスはヘルマンに頭を下げる。今ここで一時の感情に流されてしまっては、彼ら兵士は冷遇されたままだ。
（俺は彼らを、民を守らねばならない）
だが、このときのアレスはヘルマンの感情を見誤っていた。
青年の高潔さが、老人の羨望と悪意を引き寄せていたのだということに。
「うぅ……いやぁ……もう、もうやめてください……」

少女の中に欲望をすべて吐き出したオーウェンは、満足げに陰茎を引き抜くと、どさりとウェンディの身体を地面に投げ出す。

ぽっかりと無残に開いた膣穴から「どろり」と熱い体液が噴きこぼれるのがわかった。

（これで、よかったんだ……あたしはこんなだけど、ドロシーが無事で、よかったんだ……）

これでよかった、と思っているはずなのにウェンディの目頭が熱くなる。頬を幾筋も涙が伝い、悔しさに嗚咽が止まらない。

だが、真の絶望はまだ始まったばかりだったのだ。

「よしお前たち。そっちの小娘はお前らにくれてやる。好きなだけ犯し抜いてやるがいい」

オーウェンの言葉に、ハイランド兵が歓声を上げる。血に飢えたケダモノのように三つ編みの少女に飛びかかり、強化服がズタズタになってしまう。

「きゃぁああ、いやだ、いやぁああ」

地面に押し倒され、顔をべろべろねぶられるドロシーの姿を、ウェンディは呆然と見つめる。

「ちょ……なに、やめて、やめて！」

必死に訴えるウェンディの髪を掴み上げると、オーウェンはせせら笑う。

「まさか俺が約束を守るとでも思っていたのか？　敗残者には何も残らん、それが戦いというものだ」
「そ、んな……」
ドロシーを押し倒した男たちはむき出しにされた乳房に吸い付き、太ももを撫でまわし、華奢な手に勃起したイチモツを握らせる。
そのうち、運のいい兵士が少女の下肢の間に腰を割り込ませると、しごき立てた肉棒で乙女の処女穴を一気に貫いた。
「ぎひぃいいいいい」
「うほぉおお、これが魔導士ちゃんの処女穴か、たまんねぇ！」
「お、俺はその可愛いお口にしゃぶらせてやるぜ」
むぐ、ぐぅと呻く少女の唇を醜い牡肉が経ち割る。
それでもなおドロシーに群がる兵士は増える一方、首筋といわず脇の下といわず、全身を男の唾液でぐしょ濡れにされたドロシーは抵抗の術すら失われる。
「おい、いつまでも腰振ってんじゃねえ！　使える穴は全部使わせろ！」
おうよ、とドロシーの膣を貫いた男が、小柄な肢体を抱き上げる。男はそのまま仰向けになると、小ぶりで引き締まった少女の尻肉を荒っぽく指で押し広げた。

「ぶぇっへっへ、もちろんケツ穴も初物だろうなあ。俺のデカマラはちょっときついか……っ」
めりめりめりっと括約筋を強引にこじ開ける男根の感触に、少女の目は極限まで見開かれる。
だが悲鳴を上げようにも、口いっぱいに詰め込まれた肉棒のせいで、まともに呼吸すらできない。
「んぐぅ、ぐぇっ、げぇええっ」
「おらおら後がつかえてんだ。出したやつはとっとと場所を開けな！」
「うひひひ、ケツ穴に出すぞ、出すぞ」
膣と尻穴、そして唇を犯す兵士たちが、同時に腰を震わせる。熱い白濁汚液が清らかな乙女の胎内を汚し、欲望に染め上げていく。
「げほっ、げぇっ、えふぅう……」
ずる……ずるる……満足した兵士たちはすぐさま別の三人と交代する。そして彼らの後には何十という、発情した荒くれ兵士たちが控えているのだ。
ただでさえ引っ込み思案で大人しいドロシーの顔は紙のように白くなり、まるで幼子のように啜り泣き始める。

汚らわしい怪物の性器をくわえしゃぶり、そこから発射される体液を甘露のように飲んでうっとりしているではないか。

（アレスも……アレスもあたしの裸を見れば、興奮したりする？　あたしと……したいとか思うのかしら）

「あら、なんだか急におつゆが溢れてきたわよ、お姫さま。あたしとゴブリンちゃんのセックスを見て、興奮してきちゃった？」

ノーラの言葉に顔を赤らめるリーネ。だがその口から否定の言葉は出てこなかった。

「いいのよ、女なら誰だって立派なちんぽを見ればお股を濡らすものなんだから。あなたもこのゴブリンちんぽ、ぺろぺろしたいんでしょう」

「や、やめ……んむぅううっ」

ノーラに導かれるように、ゴブリンはリーネの前にしゃがみ込み、陰茎を近づけてきた。あの生臭い匂いがむっと押し寄せてきて、亀頭が頬に擦りつけられる。

「たまらないでしょう、この野性的な匂い。思いきってお口でくわえれば、もっとよく味わえるわ」

「んぅう、い、いや……っ」

このままゴブリンの陰茎などしゃぶらされたら、きっと自分の心は折れてしまうだろう。

強化服は剥ぎ取られ、魔物に処女を奪われる……その恐怖にリーネは必死に首を振って抵抗するものの、ゴブリンの大きな手が頬を掴み上げる。

「うぅうっ、んぅう……い、や……」

「ほら見てごらんなさい。あの騎士さまもあなたのみっともない姿をずっと見ているわよ」

幻影魔法の向こうで、アレスたちが必死にリーネを捜している。だがここに向かってくる様子はない。

今にもゴブリンペニスをくわえさせられようとしているリーネを、ただ見ていることしかできないのだ。アレスはどれほど歯がゆい思いを感じているだろう。

そう思うと、リーネは自分の無力さ、不甲斐なさに目頭が熱くなるのを感じた。

「どうせこのぶっといもので処女膜を引き裂かれるのよ、もう諦めた方がすぐ楽になれるわよ」

ゴブリンの凄まじい握力に、少女の唇が徐々に開かれていく。

それでも懸命に歯を食いしばるが、拳のように巨大な亀頭が歯茎を擦り立て、力任せにリーネの口を割ろうとする。

口の中に沁み込んでくる精液の味と香りにえずきそうになるが、そうなっては一気に口の中を犯されるに違いない。リーネはぼろぼろと涙を流しつつ、魔物茎に抵抗する。

（きっと……きっとアレスたちが助けに来てくれる。だから、それまで堪えるのよ、リーネ！）

だが、ノーラは狡猾かつ周到だった。リーネの意識が目の前のペニスに集中しているのを知った上で、再びリーネの股間に指を潜らせ、肉襞をくすぐり始めたのだ。

「ひぎっ？」

肉裂を直接愛撫するのではなく、神経の集中した肉芽を指先でくちゅくちゅと弄る。

リーネに自慰の経験はなかったが、そこは年頃の少女なら誰しも感じるウイークポイント。膣奥からにじみ出た蜜液をたっぷり指にまぶしつけ、クリトリスを中心に延々と嬲り続ける。

「んふぅっ！　ふ、ひぃい……」

ほんのわずか開いた口の隙間めがけ、ゴブリンがぐいと腰を沈み込ませてきた。顎が砕けるかと思うような衝撃と共に、リーネの口の中に亀頭が押し入ってくる。喉奥を激しく突かれ、猛烈な嘔吐感がこみ上げる。

その嘔吐感もろともに、魔物ペニスはずぶずぶとリーネの喉奥を突き上げてきた。

「んぐぅうううう！　ぐ、ぅうう」

「ぐぉおおっ、おおおおん！」

ゴブリンが快美の声を漏らし、激しく腰を振り立てる。
さながら地面にリーネの頭部を縫い止めるような勢いでのしかかり、リーネの呼吸が一瞬止まる。だがすんでのところで腰を引き、少女は身をよじって咳き込んだ。
すると別のゴブリンがリーネの髪を掴み上げ、朦朧（もうろう）とした少女の口に再び陰茎をくわえさせる。窒息しかけた少女はもはや唇を閉じる気力すらなく、やすやすと魔物茎を喉奥まで受け入れる他なかった。
（なに……あたし、魔物の……おちんちんを……口で……）
ただでさえ巨大なゴブリンのペニスで口中を突き回され、衝撃で頭がくらくらする。
「どう、ゴブリンペニスは格別の味わいでしょう」
自身も魔物ペニスをしゃぶりながら、ノーラはちゅっちゅと亀頭にキスを浴びせる。
一体この娘は何匹の、何十匹のゴブリンとこんな淫らな行為を繰り返してきたというのか。そして、これからリーネも同じことをされてしまうというのか。
（いや……そんなのいや。アレス、助けて……あなたじゃないと、あたし）
騎士の国の女王、少女でありながらストームランス公国指折りの剣士は、今やただの心折れた一人の少女に過ぎない。圧倒的な暴力の前に抵抗する気力すら失ったリーネの強化服のボタンが、ぱちりと弾けた。

それを見たノーラは満足げに頷き、リーネの胸元をはだけていく。
敗北を悟った者の強化服は、防御力が低下する。露わになっていく白い肌、乳房を包む下着をぐいとまくり上げると、ピンク色の乳首が姿を現す。
その二つの突起を指先でつまみ上げ、コリコリ捏ね回すと、リーネは眉をひそめるが、かろうじて声は出さないことに成功した。
「いいのよ、気持ちいいなら気持ちのいい声を出しても」
「出さ、ない……ッ」
しかし抵抗も空しく、程なく少女の喉からは荒い息、そして鼻にかかったような声が漏れる。
ノーラがゴブリンにリーネの処女を奪わせようというのなら、実に容易(たやす)かっただろう。だがノーラは敢えてじっくりと時間をかけてリーネの自尊心を削り取っていく。
一気に強化服を引き裂こうとしないのもそのため。そうして完全に少女が誇りを失ってから、初めてその純潔を奪うつもりなのだ。
「そうやって強がれば強がるほど、堕ちたときのショックが大きいわよ。そのお高くとまった顔がどんなアヘ顔を晒すのか楽しみだわ」
そう言うや、「ぎゅむぅううっ」と強く乳首をねじり上げる。

射精に関する知識に乏しいミュリエルは、一体何をされるのかと怖気を震うが、口の中の肉棒がいきなりびくびくっと跳ねた。

「んぐぅううっ？」

どくっ、どくっ……大量に口中に吐き出された白濁を、ミュリエルは飲み下すしかなかった。どろりと粘っこい液体は喉粘膜に貼りつくようで、少女僧侶は何度も咳き込む。

「よぉし次は俺だ！」

「んっ、むぐぅう」

待ちかねたように次のヒッピア兵が屹立したイチモツをくわえさせる。もはやミュリエルには両手を上げて押しのける力すらない。

それを見たアクラムはにったりと悪辣な笑みを浮かべ、片手で少女の尻肉を押し開いた。

（ひっ？）

「そろそろ引導を渡してやろう、将軍の妹。敵国の帝王の肉棒に処女を捧げる栄誉を光栄に思え……っ！」

みりっ。

めきめきめきっと文字通り肉体が引き裂かれる感覚に、ミュリエルは目を見開く。

今まで誰も押し入ったことのない純潔の泉に、今無骨な侵略者が強引に押し入り、乙女

の証をめりめりと引き裂いていく。

それなのに――――。

「ふふふ、いい吸い付きだぞ、将軍の妹。我が性感秘術によって、それほどの痛みは感じてなかろう」

ぽろり、とミュリエルの目尻から涙がこぼれる。

悔しいが、アクラムの言葉は真実であった。ヒッピア王族に伝わる秘術によってさんざん責められたミュリエルの肉体はアクラムの巨根を受け入れ、衝撃こそあれ、痛みは少なかった。

だがそれは、ミュリエルにとっては恥辱でしかない。

（こんな……こんな卑劣な男に、私の初めてが……っっ）

髭の巨漢に処女を奪われたミュリエルの唇にも、ヒッピア兵の陰茎が激しく出入りする。そしてアクラムがゆっくりと抽送を始めると、少女の膣穴はぞりぞりとアクラムの肉棒を擦り立てるのだ。

「おぉ、さすがに女僧侶の初物は初めてだが、実にいい塩梅だ。それ、お前たちもどんどんこの娘に精液を馳走してやれ」

言われるまでもなく、少女の頬粘膜や舌の感触もまた絶品級。二人目が大量のザーメン

をミュリエルに飲ませると、すかさず三人目が迫る。
ぬちゅ、ぬちゅ、ずぶぶっ……上下の口に二本の陰茎を突っ込まれるという辱めに、ミュリエルは理性が徐々に麻痺してゆくのを感じていた。
（気持ち悪い……痛い……はず、なのに……どうして、身体が熱いの……）
「うぉっ、出るぞ、全部飲めぇ！」
入れ替わり立ち替わり、ヒッピア兵たちがミュリエルの口の中に精液を吐き出していく。その間も、アクラムはずっと腰を突き上げ、処女穴を擦り続ける。
（あぁっ、また背中……）
しかもピストンしながらもアクラムは両手でミュリエルの乳を揉み、肩甲骨に唇を押し当てて、れろれろとねぶってくるのだ。
それも自慢の秘術なのか、薄く小さな肩を吸われると、ぞくぞくするほど気持ちいい。
「へへ、こいつずいぶん顔が緩んできましたぜ、アクラムさま」
「そうだろう、これが我が秘術の効果よ。ほれ、お前たちのちんぽももう自分から吸っているだろう」
ミュリエル自身も気付いていなかったが、いつしかミュリエルは自分から舌を伸ばし、ヒッピア兵たちの陰茎をねぶり回していた。

「たとえ処女でも昇天させる、これをされ続ければこやつは完全にワシの操り人形よ、くくく」
（わたしが……こいつの、あやつりにんぎょうに……）
耳からはアクラムのゲスな言葉が入ってくるが、その意味が理解できない。今はただもっとちんぽをしゃぶりたい、股間をずこずこして欲しいということしか考えられない。
「さあ、ミュリエル。お前に本当の快感というものを教えてやる。こう言うだけでいいのだ、アクラムさまの精液をください、とな」
「あ……ぁ……」
「言うのだ」
破瓜の痛みは既になく、処女膜を失った膣はじんじんと鈍い快感を訴えている。身体中が敏感になって、アクラムに触れられた個所が火照る。
「あく、らむさまの……せいえきが、ほ、ほしい……ください……っ！」
乙女の口から漏れる淫語にアクラム王のスイッチが入る。凄まじい突き上げにミュリエルの身体が浮き上がり、ミュリエルは細い肢体をそらせて悶えよがる。
「あぁあっ！　あっ、あぁああ～っ」
「それ、受け取れぇええっ」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

偶数月の
17日に発売！

業界唯一のアダルトノベル雑誌！

二次元ドリームマガジン

2D DREAM MAGAZINE

cover illustration by
おにぎりくん
(ALICESOFT)

魔剣士リーネ2 好評連載中！

©ALICESOFT

KTC 編集・発行 キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコウビル TEL:03-3555-3431(販売) FAX:03-3551-1208

▶最新情報は公式サイトへ！ キルタイムコミュニケーション 検索

魔剣士リネ

Leane of Evil Blade

原作:まくらカバーソフト

小説:空蝉

挿絵:桐島サトシ

独特のシステムで好評を博した
大ヒット同人ゲームが
衝撃のノベライズ!!

全国書店、各電子書籍サイトにて

好評発売中!